

## 西泠印社

中国の浙江省、杭州市の西湖の西北にある孤山という島の麓にある。

西泠印社は篆刻や金石学・書画の研究を目的とする学術団体であり、文物の收藏や、展示と鑑賞、出版事業もする企業であり、社内には庭園もある。「西泠橋」の袂にあるので、「西泠」と名づけられた。

中国の篆刻芸術のメッカである。

孤山には、宋代のころから、篆刻家たちが集まって、

金石文字・篆刻の研究や鑑賞会を催したという。

西泠地域は、昔から優れた篆刻家が現れた特別な場所であった。

白樂天が造ったという白堤の北端に西湖十景の一つである「断桥残雪」がある。

白堤の南端に十景の一つである「平湖秋月」がある。西湖はお月見の名所である。

蘇軾らの祠を過ぎ聖因寺へ。聖因寺の額は雍正帝の書。

その隣（図版の中の2）には俞曲園が主催した「詒經精舍」があった。

ここは呉昌碩が始めて遊学したところである。湖には日月光華という牌楼がある。

ここから西湖を見ると、湖心亭・三潭印月が浮かんで見える。右方には蘇堤の柳。

図の中の3には『四庫全書』を収めた「文瀾閣」がある。

これは、太平天国の乱で焼かれ瓦礫となったが、1881年に再建された。

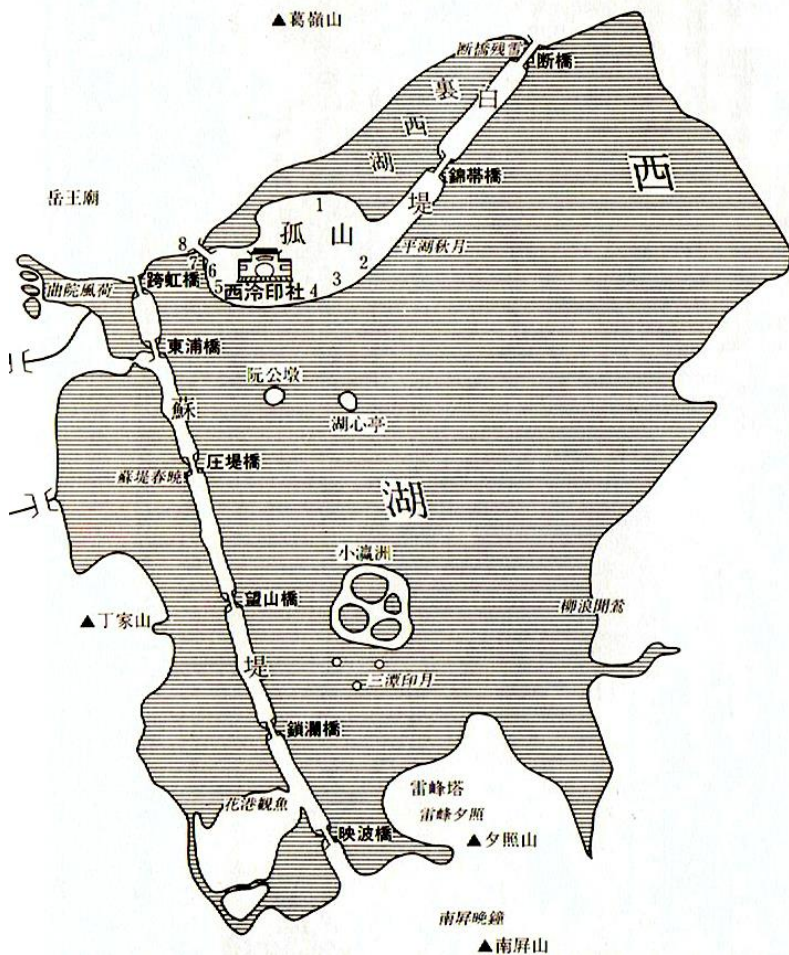
4は、「左将」「公祠」。朱熹らの祠を過ぎ広化寺から俞楼へ。俞楼には彭玉麟の梅花図の石刻が回廊に立つ。

5は「広化寺」、境内に蘇東坡が歐陽脩（六一居士）を記念して名づけた「六一泉」がある。

6は「俞楼」、俞曲園の旧友や弟子たちが俞曲園を尊敬して築いたもの。洞門は「六一泉」に通じている。

7は「西泠橋」。8は「蘇小小墓」、蘇小小は南朝の斉の歌妓で李賀の詩に詠われている。

孤山路は、西泠橋で終わり。1は「放鶴亭」



杭州西湖（1904年頃）

「西湖十景」

断桥残雪  
平湖秋月  
柳浪聞鶯  
三潭印月  
曲院風荷  
蘇堤春曉  
南屏晚鐘  
双峰挿雲  
雪峰夕照  
花港觀魚



丁敬



太湖の周辺



竹閣



正面額：「西泠印社」 吳昌碩の書



柏堂



堂内  
額「柏堂」は俞曲園の隸書。  
聯は高豊と沙孟海の隸書。

正門を入って左側に蓮泉がある。蓮泉の左奥に竹閣がある。  
竹閣の中には篆刻作品がある。蓮泉の北に柏堂がある。創建は宋代で、  
1876年に再建された。



正門 孤山路側にある



正門の題字（沙孟海書）



吳隱



葉銘



王視



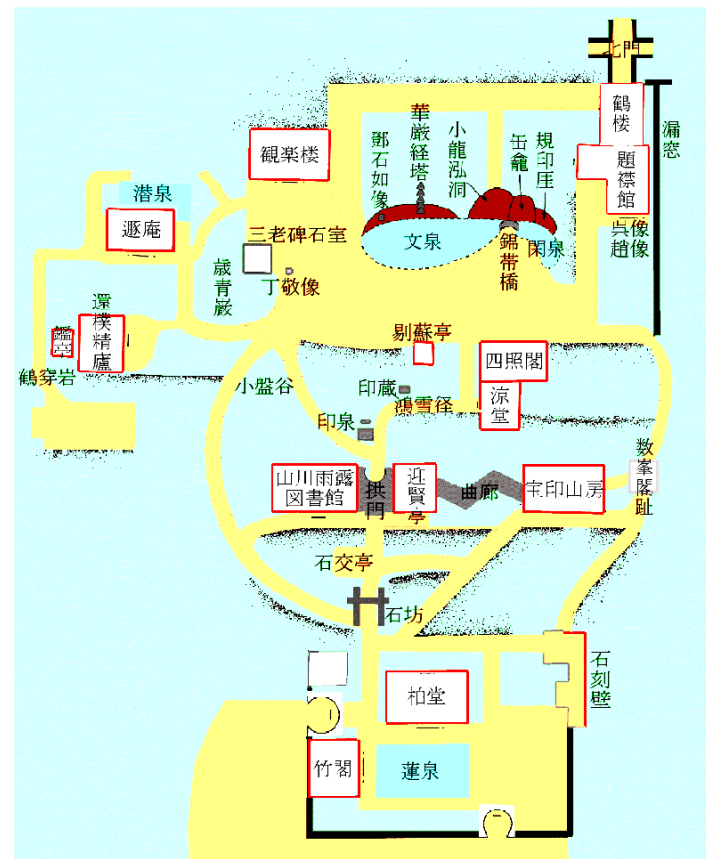
丁仁



吳昌碩

正式に結社され「西泠印社」と名づけられた。  
初代社長に吳昌碩が選ばれた。日本からは河井荃廬と長尾雨山が社員になっている。  
毎年、春と秋に集会を開催し、書、画、印などの研究会が開かれた。

今は、孤山路に面した南側の外門が正門だが、昔は北門が正門だった。  
正門は西泠印社のトレードマークになっている。門の題字は沙孟海の書だが、以前は吳昌碩の書だった。正門から中に入ってみよう。



孤山路

西泠印社見取り図

1904年（光緒30）  
丁仁・王視・葉銘・吳隱ら4人の青年篆刻家たちが、篆刻の振興と研究のため、孤山の麓に土地を手に入れ、会社をつくったのが、西泠印社の始まりである。

丁仁は先祖から受け継いだ、孤山の広い土地を寄贈した。

1905年、最初の建物である仰賢亭が完成した。以後10年ほどかけて、次つぎと施設が建てられ、整備されていった。

1913年（民国2）





宝印山房の入口

今は外国人相手の売店になっているが、本来は先輩や故社友を祀るための儀式的場所として建てられた。

額「寶印山房」は趙之タンの書。

聯は清道人の書



宝印山房



宝印山房

仰賢亭から出て、曲廊を抜けると、**宝印山房**がある。これは1912年に建立され、1977年に再建された。



仰賢亭の出口

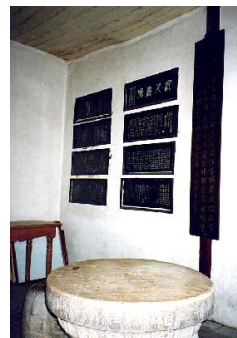


仰賢亭の外壁に嵌め込まれている「社記」

中央は王禔の書、張景星撰。左右の4石は吳昌碩の撰書。



山川雨露図書室



仰賢亭の内部

中央に羅聘画の丁敬像  
刻石が祀られ、両側の壁に、印人画像刻石が嵌め込まれている。



仰賢亭の内部にある石圓卓の側面

この石卓は、1910年に、西泠印社の創始者4人の共作で、丁敬像に捧げられたもの。

丁仁が文、王禔が篆書で書き、吳隠が刻し、葉銘が制作を監修した。

石交亭の先に**山川雨露図書室**がある。これは1912年に建てられた。図書室の右隣に拱門をはさんで、**仰賢亭**がある。ここは、西泠印社の中心である。



石刻壁：ギャラリーになっている。



石坊

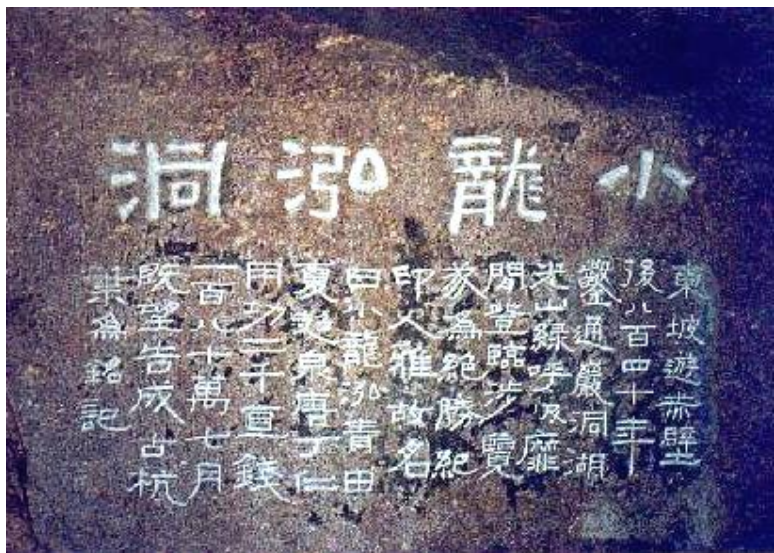


石交亭

「石交」とは金石の交わりのこと。

柏堂の東、正門を入って右手に**石刻壁**がある。回廊になっている。鄧石如や吳昌碩の書が嵌め込まれている。石刻壁の北を左に行くと、**石坊**がある。これは1924年に、西泠印社創立20周年を記念して建てられた。石坊の先に**石交亭**がある。これは1912年に建立されたが、近年再建されたものらしい。





小龍泓洞 緣起

葉銘の撰書。開通褒斜道刻石の文章を手本にしたと述べている。



小龍泓洞の出口の錦帯橋

錦帯橋の東には閑泉がある。



小龍泓洞内の吳昌碩画観音像



左から、鄧石如像と小龍泓洞と缶龕と錦帯橋



缶龕

朝倉文夫が吳昌碩頭像を制作し贈呈したので、1921年にこの龕がつくられた。

内壁の聯は王一亭の書。

台座下の銘は像の背に彫られていた吳昌碩の自賛を復元したもの。その下には沈曾植の缶公像贊と缶廬上寿記并詩が彫られている。

文泉の向こうに小龍泓洞がある。小龍泓洞の左に鄧石如像、右に缶龕がある。小龍泓洞は1923年、丁仁の出資で掘られた。葉銘が縁起を書いている。鄧石如像も丁仁の出資で作られた。この像は文化大革命のときに失われたが、1978年に再建された。「龍泓」とは丁敬の号である。



鴻雪徑



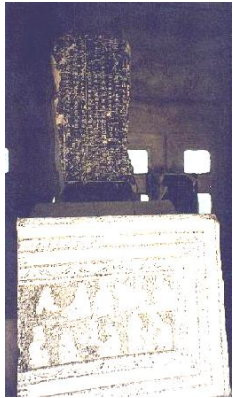
涼堂



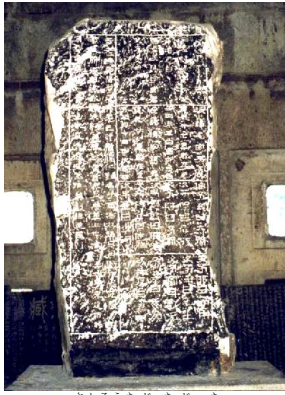
文泉の前の庭

宝印山房の東に数峰閣がある。印社発創の地といわれる。仰賢亭と図書室の間にある拱門を抜け、分かれ道を右に登り、印泉を見て、鴻雪徑を進むと印蔵がある。さらに進むと涼堂に突き当たる。突き当りを左に登ると文泉の前の庭に着く。左側には剔辭亭がある。さらに登ると、四照閣がある。





漢三老石室の内部



さんろうきじ きじつき  
三老諱字忌日記



「三老諱字忌日記」拓本部分

「吳昌碩・日下部鳴鶴 結友百年銘誌」碑がある。日下部鳴鶴は「明治の三筆」の一人。



漢三老石室

さんろうきじ きじつき  
「三老諱字忌日記」を保管するために建てられた。

1922年に建造。

この碑は、「漢三老碑」とも呼ばれ、後漢の建武28年(西暦52年)の建碑で全文217字の古隸碑。

三老とは漢代の官制で、文化を司る役人のこと。

正面題字は馮煦。  
聯は張鈞衡と黃葆戉。側面の聯は朱景彝。  
裏の聯は童大年。



漢三老石室の内部



華嚴経塔

11層からなる塔。

上8層には仏像が彫られている。

その下2層には金農の金剛經が刻されている。

その下1層に華嚴經を刻し、台座には18横真像と出資者名が記されている。

西泠印社の頂上にあるこの塔は、1924年に建立された。

西湖のどこからでも見える、シンボリック的存在である。

文泉の背後に華嚴経塔がある。文泉の西側には漢三老石室がある。



題襟館と鶴廬

題襟館は1915年の建立。別名「隱閒樓」。上海にある吳昌碩を中心とする題襟館書画会の出資で建てられたので、この名がついた。

鶴廬は題襟館の北側にある。1923年に丁仁が建てたもの。鶴廬は丁仁の号。



鶴廬と北門

小龍泓洞のトンネルをぬけ、右に曲がると、鶴廬の下に北門がある。北門を出ると孤山の北側になり、裏西湖に臨む。



題襟館入口の外：趙之謙と吳昌碩の画像がある。

室内の左側の壁に、題襟館の縁起と出資者名を記した隱閒樓記が嵌めこまれている。長尾甲(雨山)の名も見える。

額は金爾珍、聯は陶在寛の書。西側の隱閒の二字額は鄭孝胥の書。

閑泉の東を上に登れば、題襟館と鶴廬がある。



西泠印社は1923年に創立20周年、1933年に創立30周年の大展覧会を開催したが、1937年（民国26）日本軍の杭州占領により活動を休止した。第2次世界大戦が終わると再興されたが、1949年中華人民共和国が成立すると、西泠印社は杭州市に没収され、また活動を休止した。1957年ころから活動を再開し、1963年には創立60周年のイベントを行なったが、1966年文化大革命が始まると、西泠印社は標的となり、破壊され、再び活動を休止した。1976年文化大革命が終ると、また、書道関係の出版社として再興された。1988年日本初の西泠印社展が開催された。

現在、学術団体として、また、印・書道用具の販売、書道関連書籍の出版・販売などの活動を行なっている。



還樸精廬

1919年に建立された。  
西泠印社の西端にあり、蘇堤が眼下に見える



還樸精廬の額

呉昌碩の書。



日下部鳴鶴



河井荃廬



長尾雨山

遯庵を南に行くと、**鑑亭**と**還樸精廬**がある。



遯庵

遯庵は呉隠の号。呉隠は先祖を祀るために、1915年、これを建てた。額は呉昌碩の書。聯は張祖翼・朱景彝の書。



潜泉と潜泉記

遯庵の背後の泉を**潜泉**と名付け、岩壁に**潜泉記**を刻した。  
潜泉印泥の名はこれによる。

右は「呉昌碩・胸像の縁起碑」

題字は西川寧。  
撰文は中村哲。  
書は柳田泰雲。



観楽楼を西に行くと**遯庵**がある。



観楽楼

1920年（民国9）呉善慶の出資で建立。

楼の入口に、縁起を記した**印社新建観楽楼碑**がある。

呉昌碩は動乱を避けて、1927年の春から秋にかけ、上海からこの楼上に疎開した。

1959年から、ここは**呉昌碩記念室**となり、呉昌碩が使った机などが保存され、作品が陳列されている。



観楽楼 1階

1階には西安雄制作の呉昌碩の胸像がある。1980年制作。  
額は沙孟海・王个簣の書。聯は諸楽三。



丁敬像

1921年、丁仁によって建てられたが、文化大革命中に失われ、1978年に再建された。

漢三老石室の左に**丁敬像**があり、北側に**観楽楼**がある。

西冷印社は4人の青年たちによって、1904年に計画されたが、その頃、世界は、人類が、かつて経験した事のない破局に向かって突き進んでいた。

清国はアヘン戦争につづく太平天国の乱と、帝国主義列強の侵略と内乱により、滅亡へと坂道を転がっていた。日本は、明治維新の後、急速に近代化し、欧米列強に伍して、中国をはじめとするアジア諸国への侵略を開始。日清戦争の勝利で、台湾を占領した。

帝国主義列強は、アジア・アフリカをほぼ分割し終えて、その予先を中国へと一斉に向けた。ドイツ、ロシア、日本、イギリス、フランスによる利権争奪戦が始まった。

中国でも近代化に向けて、孫文ら青年知識人たちが活動を始めていたが、ついに、中国民衆の怒りも頂点に達し、義和団運動が北中国一帯で頻発した。この運動は義和団戦争に発展し、1900年に欧米列強と日本により鎮圧された。以後、清国は列強の管理下におかれた。

1911年、辛亥革命、清国滅亡。1912年、中華民国臨時大統領に孫文が就任するが、孫文との密約により、数カ月後、袁世凱が臨時大統領に就任した。議員内閣制を唱えた宋教仁

は袁世凱に暗殺され、孫文は日本へ亡命、袁世凱は正式に総統に就任した。

1914年7月、ヨーロッパで、第一次世界大戦が勃発した。

1915年、欧米の民主主義思想にあこがれた陳独秀は『新青年』を上海で創刊した。また胡適らが「文学革命」を提唱し、文学革命運動が起こった。

1916年、袁世凱は皇帝に即位し帝政を復活させたが、数カ月後に死んでしまった。

以後十年余り中国は軍閥割拠の時代となった。

1917年11月、レーニン、スターリン、トロツキーらの指導によって、ロシア革命が起こった。

1918年11月、第一次世界大戦終了。

1919年以後、ドイツ、中国、日本と共産党が生まれていった。

大戦終了後、連合国が日本の山東省の権益を認める決議をしたため、

民主主義国の欺瞞に失望した中国の青年たちは、社会主義運動に活路を見出し、マルクス主義へと結集した。

1918年4月、毛沢東は長沙で新民学会を組織し勤工儉学運動を推進した。この運動でフランスに留学した学生に周恩来や鄧小平がいる。

1919年10月、孫文は中国革命党を中国国民党に改組し、

1921年4月に、中華民国正式政府を樹立し、

桂林で北伐を準備していた。

中国共産党はコミンテルンの指導で1920年初夏ごろから、陳独秀と李大釗を中心に組織され、1921年7月、上海で、正式に成立した。党員は57名であった。その中に若き毛沢東と周恩来がいる。

1922年、再度、コミンテルンの指導で、共産党員が国民党に加入して協力することになった。(国共合作)

1925年3月、孫文は、「革命いまだ成功せず」と述べ、中国の自由と平等の実現を求めた国民党への遺書と、ソ連あての書簡を残して、北京で死んだ。孫文の死後、国民党内から共産党員排除の動きが激化してきた。

国民革命軍の第一軍の軍長だった蒋介石の目的は、国民革命軍、全6軍の掌握であった。

1926年3月、蒋介石は反左派・反共クーデタをおこない、党大会で共産党員の勢力を制限する案を可決させた。コミンテルンも蒋介石を支持し、共産党はコミンテルンの方針に従わざるをえなかった。蒋介石は国民革命軍総司令、国民政府委員、国民党中央執行委員会常務委員

会主席に任命され、独裁的権力を手に入れた。7月、彼は北伐を開始、各地で勝利した。この勝利は民衆の革命運動を進展させ租界を回収し、地主を追いつ出し、中国を解放した。12月、武漢政府成立。1927年4月、南京政府成立。左右の対立が激化してゆくなか、蒋介石は上海で反共クーデタを敢行した。にもかかわらず、コミンテルンは国民党を支持したが、第一次国共合作は終結した。1928年6月、北伐軍が北京を占領し、北伐は

完成した。

張作霖は関東軍により爆殺され、7月、国民政府は不平等条約廃棄を宣言し、張学良は国民政府に合流した。



孫文



宋教仁



胡適



魯迅



袁世凱



レーニン



スターリン



トロツキー



毛沢東



周恩来



蒋介石



このような動乱の時代にもかかわらず、西泠印社では、着々と書法研究のための施設が建設され、熱心な篆刻家たちが黙々と、中国の伝統を守り育てていたのである。吳昌碩はあらゆる動乱を国民革命のせいにしていたようだ。彼は政治や世間に、うとかったようである。ある作品には、民国になっても、宣統の年号を用いている。彼は現実を認めたくなかったのかもしれない。西泠印社では世間とは別の時が流れていたのであらうか。

1928年10月、蒋介石は中華民国国民政府の主席に就任したが、独裁に反対する各派との抗争がつづいたが、満洲事変が勃発し、一時休戦、結果、蒋介石は辞任したが、すぐ、軍事委員会委員長として復帰した。

1927年11月、共産党は国民党の旗を降ろした。1928年5月、毛沢東の部隊は朱徳の部隊と合流し、工農紅軍第4軍と称した。1931年9月、満洲事変勃発。11月、江西省瑞金に中華ソビエト共和国臨時政府が成立し、毛沢東が主席に選出された。1932年3月、満洲国建国宣言。1933年1月、ヒットラー政権成立。2月国際連盟は満洲国を承認せず、日本は国際連盟を脱退した。国民政府は中華ソビエト政権に対して包圍攻撃をくりかえし、1934年10月、ついに中華ソビエト政権は崩壊し、紅軍の大長征と呼ばれる逃避行が始まった。

1935年7月、コミンテルンが反ファシズム統一戦線を打ち出し、共産党はその指令に従い、蒋介石もいやいやながら（西安事件）、日本の侵略に対抗するため、1937年9月、第2次国共合作がなり、内戦停止、一致抗日で協力することになった。

同年7月、盧溝橋事件勃発、12月、日本軍の南京大虐殺。

1939年9月、ドイツ軍がポーランドに侵入し、第2次世界大戦が開始された。

西泠印社は1937年（民国26）日本軍の杭州占領により活動を休止した。

周りが火の海るとき、静かに落ちついて、何年ものあいだ、研究に専念できるわけがない。

1940年3月、日本は南京に汪兆銘政権を樹立した。9月には日独伊三国同盟調印。

1941年12月、国民政府は、日独伊に宣戦布告。12月8日、日本の真珠湾攻撃により、アジア太平洋戦争開始。

1943年2月、スターリングラードでドイツ軍が降伏。11月、米・英・中カイロ会談。

1945年8月14日、「終戦の詔勅」でポツダム宣言を受諾したことを述べ、15日、日本は無条件降伏した。

日本では8月15日を「終戦記念日」とするが、この日を大韓民国では「光復節」、朝鮮民主主義人民共和国では「祖国解放記念日」とする。中華人民共和国では、8月15日ではなく、日本代表が降伏文書に調印した9月2日の翌日の9月3日を「抗日戦争勝利記念日」と定めている。この戦争での日本人戦没者は310万人だが、数知れぬアジアの戦没者がいた。中国では、1937～45年の間だけでも、日本との戦いで1000万～2100万余人が死傷、1000万余人が虐殺されたという。日本軍は、南京大虐殺、三光作戦、毒ガス作戦、細菌戦、生体解剖、従軍慰安婦、アヘンの栽培と販売など、悪の限りを尽くしている。

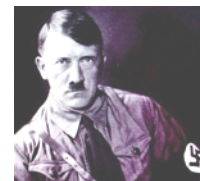
中国人にとって、抗日戦争の勝利は、中国の歴史上、記念すべき出来事だった。そのわけは、中華民族が一体となって侵略者に勝利したこと、アヘン戦争以来の反侵略戦争ではじめて完全に勝利した戦争であったこと、世界の反ファシズム戦争の一環であったこと、そして、中華人民共和国建国のための条件が準備された時期であったことなどが挙げられる。

## 第2次世界大戦が終わり、西泠印社は再興された。

日本が降伏し、戦争が終ったので、中国の多くの人びとは、平和的に民主的な中国が再建されると期待していたが、しかし、1946年6月、国民党10万が中原解放区への一斉攻撃を開始、全面内戦が勃発した。



中国の日本軍 1937年



ヒットラー



朱徳



1949年10月1日、天安門の上から、毛沢東は、30万の群衆の前に、中華人民共和国の成立を宣言した。その時、毛沢東は58歳、周恩来は51歳、劉少奇は50歳、朱徳は62歳であった。28年前の、上海での共産党創立大会に参加したのは毛沢東だけであった。28年前、57名で始まった中国共産党が中華民国に替わる国家を建設することになった。彼らは「独立、民主、平和、統一、富強の新中国」建設を目標に掲げ、諸民族の平等を宣言した。

西冷印社は、中華人民共和国が成立すると、杭州市に没収され、また活動を休止した。



中華人民共和国建国宣言

同年12月、蒋介石は成都から台北へ落ちのびた。統一を実現するため、1950年10月、人民解放軍はチベットに進駐、翌年5月、「和平協定」が締結された。中国は、漢民族と55種の少数民族からなる多民族国家である。人口比は漢族92%に対し少数民族は8%ほどである。経済も急速に回復していった。1956年、生産手段の公有化がほぼ完了した。

1956年2月のソ連共産党第20回大会での、フルシチョフのスターリン批判は、世界の共産主義運動に衝撃を与えた。1956年、共産党は「百花斉放、百家争鳴」の方針を提起し、知識人の社会主義建設への参加を求めた。1957年、毛沢東は、共産党に対する批判を歓迎するポーズをとった。それを真にうけた民主諸党派や知識人や学生たちが徐々に発言を始め、共産党の統治を否定する発言まで現れ、勢いを増していった。6月8日、共産党の反撃が始まり（反右派闘争）、知識人や民主諸党派に自己批判を迫った。結果、55万人の知識人が、「右派分子」の烙印を押され、社会的地位を奪われ、表舞台から姿を消した。社会主義や共産党に対する疑問や批判は、弾圧や処分の対象とされた。



ダライ・ラマ

中ソ両党の間に亀裂が生じた。それは世界の共産主義運動の分裂へと拡大された。中印両国の提携は、周恩来とネルーの働きで、新興アジア・アフリカの団結の象徴であったが、1959年3月、ダライ・ラマらが反乱を起し、失敗してインドに亡命したことで、中印国境紛争が起こった。この事件はアジア・アフリカの民族運動に亀裂をもたらした。

1958年夏、米英を追い越すことを夢見て、大躍進運動が始まった。

1959年4月、「人民公社」と「大躍進」政策の失敗により、国家主席の地位を追われ、劉少奇が代わった。大躍進運動による死者は、二千万人から五千万人の餓死者を出した。

1960年4月、中ソ論争が激化、ソ連は中国に派遣していた技術者を引き揚げ、257のプラント契約を破棄した。劉少奇と鄧小平らは、経済再建をするため、「大躍進」、人民公社政策を修正し、1965年には1957年の水準までに生産を回復させた。



大躍進運動 製鉄

1962年には、「右派」のレッテルを貼られた大部分の人びとも、名誉回復された。

1966年5月、突如、文化大革命が起こった。

毛沢東の指導で、党・政府・軍の指導者たちが反革命修正主義分子として批判され、学校や職場でも多くの人びとが反社会主義分子として糾弾され、地位を追われた。

紅衛兵が登場し、天安門広場を100万の群衆がうめつくし、街には壁新聞が氾濫した。国家主席の劉少奇、党総書記の鄧小平ら幹部が失脚した。

文革の背景には、党内の政治派（階級闘争重視派）と経済派（走資派）との対立。国際共産主義運動の路線をめぐるソ連共産党との対立。ソ連よりの劉少奇派と、ソ連を修正主義とする毛沢東派との対立。毛沢東とその周辺による権力奪回の策謀など。

1972年9月、党副主席の林彪がクーデタを企て、失敗しソ連へ逃げる途中墜落死した。

1975年から76年にかけて、首相周恩来を標的にした、文革急進派の四人組による「批林批孔」運動が起こった。



文化大革命



林彪



鄧小平



劉少奇



文革によって中国の国力は低下、社会は荒廃し、中ソ関係は悪化した。1969年、ウスリー江珍宝島でソ連と武力衝突が起こった。中国はソ連を「社会帝国主義国家」と呼ぶまでになった。この間、アメリカが中国に接近、中国は西側諸国との関係を深める。1972年2月、ニクソン米大統領を北京に招請、9月には日本との国交を正常化した。1975年4月、蒋介石が死去。ベトナム戦争が終った。1976年1月、周恩来首相が死去。7月に朱徳が死去。9月に毛沢東の死で追いつめられ、クーデタで権力を奪取しようとしたが、首相の華国鋒によって逮捕された。毛沢東の死と「四人組」の逮捕によって、「文化大革命」と「毛沢東時代」は終った。文革による死者は、40万人から8000万人以上と諸説ある。

1977年7月、鄧小平が復権、党中央委員会は、個人崇拜を禁止し、文化大革命は徹底的に否定された。文化大革命の終結によって、中国は経済の問題に重点をおくようになり、経済開放政策へ。鄧小平が主導権を握り、「4つの現代化」を目標に再出発した。

1979年1月、アメリカとの国交樹立。2月、ベトナムと戦争勃発（中越戦争）。

3月、壁新聞、デモ規制通告、「北京の春」終る。1980年2月、劉少奇名誉回復。

1982年9月、党の大会で、党主席制度が廃止され、

総書記に胡耀邦、首相に趙紫陽をすえ、鄧小平体制が確立され、

中国は「社会主義市場経済」の確立へ向けて舵をきった。（改革開放路線）

西冷印社は1957年ころから活動を再開したが、1966年、文化大革命が始まると、印社は標的となり、破壊され、再び活動を休止した。1976年文化大革命が終ると、また、書道関係の出版社として再興された。

## 芸術の改革

陳独秀

「もし中国画を改良しようとするなら、まず四王の画に対して革命を興し、これを倒さなければならぬ。なぜならば、中国画を改良するには、どうしても洋画の写実の精神を採らなければならぬからだ」といった。民国初めの革新的文化人たちは、西洋の写実の精神と科学的方法を借り、現実と自然に回歸することが、伝統絵画を改革することだと考えていた。多くの若い芸術家たちが日本や欧米に留学し、油絵、水彩、デッサン、版画、彫塑などを取り入れて、中国画の硬直した伝統を打破しようとした。西欧の様ざまな美術流派や芸術理論が潮のごとく入ってきた。野獸派などは、個性の解放と創造精神の象徴と見なされ人気があった。

伝統の革新を求める人びとの目標は「中国と西洋を合わせ、画学の新紀元となす」ことであった。中国は、美術教育、博物館、美術館、美術展、出版事業、芸術市場など西洋文化が築いてきたものを移植した。その多くが、清末民初に、日本経由で中国に移入されたものである。

1911年、劉海粟は上海図画美術院を創立し、「残酷無情の干からび墮落した社会のなかで、芸術を宣伝する責任を尽くし、本来の創造精神を回復しなければならない」と呼びかけた。高剣父は1912年、上海で『真相画報』を創刊し、その創刊号で「美術・文学の精神をもって、中華民國の導きとなす」と書いた。

同じ頃、蔡元培が民国政府教育総長の名で「美感教育（美育）」を提起し、1917年には「美育をもって宗教に代える説」を発表し、美術教育を新国民の人格形成の手段とした。杭州国立芸術専門学校校長の林風眠は「われわれの時代、芸術家は時代の使命を負い、芸術を社会改造の一つの推進力にしなければならない」と呼びかけた。

傅抱石は「美術家は時代の先駆者であり、民族文化の運動の能吏である」と言い、陳独秀は元・明・清の文人画を「もっぱら意を写すことを重んじ、物に肖せることを尚ばず」それゆえ打倒すべきであると攻撃した。

このように、近代中国の芸術家は、積極的に社会に参加して、絵画グループを組織したり、学校をつくったり、雑誌を出版したりして、民衆のなかに芸術を普及、啓蒙し、伝統的な文人芸術家とは異なった、新しい近代芸術家像を作っていた。



傅抱石



林風眠



高剣父



蔡元培



劉海粟



ポスター マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン・毛沢東